九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

芭蕉の「荒海や」の句について(一)

小島, 吉雄

https://doi.org/10.15017/2332971

出版情報：文學研究. 38, pp.121-138, 1949-12-20. The Kyushu Literary Society
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

芭蕉の「荒海や」の句について（一）

小島吉雄

一

芭蕉の

荒海や佐渡に横たふ天の川

の句は、通説では、元祿二年八月四日越後の出雲崎での吟だといふことになつてゐる。その證憑は、芭蕉に銀河の序といふ文章のあること、また勸進牒・泊船集・柴橋・雪丸げといふやうな俳書に、出雲崎での吟だとする詞書のあること等である。そして、この句を出雲崎での吟だとするから、志田義秀博士のやうに、「奥の細道」に於て「文月や六日も常の夜には似ず」の句の次にこの「荒海や」の句を置いたのは、故意の逆置であるといふ人も出てくるわけであるが、この句は、果して、出雲崎での吟であらうか。古く、馬場錦江は、それを疑つて、或は直江津での作ならむかと言つてゐる。

曾良の奥の細道隨行日記を見ると、「八月四日、快晴、風三日同風也。……同晩申ノ上刻出雲崎着、宿ス。夜中

雨強降」とある。また、同じく曾良の俳諧書留には、越後高田の細川春庵亭での歌仙の次に「七夕」と題してこの「荒海や」の句を書きしるしてゐる。隨行日記に「夜中」とあるのは、夜半の意ではなく、終夜の意であつて、そのことは同書の他の日の記事に夜半と夜中との使ひ分けをしてゐるのでも分る。たとへば、「タヨリ夜半マデ雨降」と書き、また「及暮大雨、夜中不止」「申刻ヨリ雨降リタ方止。夜中折々降ル、朝止テ」としるしてゐる。すなはち、これで見ると、八月四日は晝の間は晴天であつたが、出雲崎へ着いてから雨となり、夜ぢゆう強雨だつたといふことになり、もちろん天の川などは見えなかつたわけである。また、曾良の俳諧書留は、奥の細道の旅行中の句を大體制作順に書きとめたものであるから、その排列の順序からいふと、高田での制作といふことになりさうである。つまり、曾良の書き留めておいた日記や手控へによれば、「荒海や」の句が出雲崎での吟ではないやうにも思はれるのである。

さきにも一寸觸れた如く志田義秀博士は、その著「奥の細道・芭蕉・蕪村」及び「芭蕉展望」の中で、芭蕉が「奥の細道」に「文月や」の句を前に置き「荒海や」の句を後にしたのは、芭蕉の虚構的作爲であつて、彼がかかる事實に反する作爲をしたのは嵐雪の「其袋」の記事に一致させるためであり、また曾良の俳諧書留に「荒海や」の句を「文月や」の句の後にしてゐるのは、曾良が芭蕉の虚構に同調したためであると述べられてゐる。芭蕉が、その紀行文に於て、自作の句をその制作の時日の順に竝べない例は、甲子吟行にも笈の小文にもあり、また、奥の細道にもあるのであるから、(註)この「荒海や」の場合にも、一往は志田博士のやうな考へも起り得るわけであるが、志田博士のこの論は、「荒海や」の句が出雲崎での作だといふことを前提とするものであり、更に、その上に「其袋」の資料的價値を高く評價し、曾良の書留を資料的に低く評價せられるが故に、かういふ「其袋」への同調説となつたのである。しか

し、博士は「荒海や」の句が出雲崎での作だといふ精細な論證を試みてゐないし、「其袋」の資料的價値高き所以をも述べてをられぬ。從つて、われわれとしては、博士の說をも今一度考へ直してみる必要が生ずるのである。

（註）甲子吟行や笈の小文に制作の時日の順に句を竝べてゐない例は、志田博士の「芭蕉展望」に擧げてある。また、「奥の細道」に於ける同樣の例は、たとへば、尾花澤の條に、「まゆはきを俤にして紅粉の花」といふ句をあげてゐるが、これは曾良の書留によれば、立石寺への途中での作であり、芭蕉はそれを繰りあげて前に持つて來たのである。また、同じく尾花澤の條に、曾良の句として「靈飼ひする人は古代のすがたかな」といふのが載せられてゐるが、これも曾良の書留によれば、高久から須賀川への間で作られたもので、芭蕉はそれを改作してこの尾花澤のところへ入れたのである。これは以前の作を後の方へ持つて來た例である。

二

「其袋」には、「奥の細道」での芭蕉の句が五句出てゐる。すなはち、

北國何トヤラいふ崎にとまりて所の夷もおし入て句をのぞみけるに

文月や六日も常の夜には似ず

その夜北の海岸にむかひて

あら海や佐渡に横たふ天の川

名月は敦賀に在て

名月や北國日和さだめなき

氣比の宮へは遊行上人の白砂を敷ける古例ありてこのころもさる事ありしといへば

月清し遊行のもてる砂の露

淺水のはしを渡る時俗あさうつといふ淸少納言の橋はとある一條あさむつのとかける所也

あさむつや月見の旅の明はなれ

とあるのがそれであるが、志田氏は、この一括して記載せられてゐるのは、芭蕉が旅先きからこれらを一括して嵐雪に手紙ででも知らせたからであらうと推定してをられる。一體、「其袋」といふ集は、芭蕉の門人嵐雪の編纂で、元祿三年夏に成つたものであるが、この集の記事は、必ずしも正確なものとは言ひがたいのであつて、たとへば、その秋の部に、

同じく伊勢の國出るとて

はまぐりの二見へわかれ行く秋ぞ

とあるのなどは、明らかに誤りであつて、これは伊勢の國での作ではなくて、大垣から伊勢へ行かうとする時の離別の句である。また前掲の「文月や」の句の前書きにしても、「北國何とやらいふ崎にとまりて」といふのは、暗に出雲崎もしくは鉢崎一宿のことを指して言つてゐるらしいのであるが（北陸路で崎の着く土地で芭蕉の宿つたのは、この出雲崎と鉢崎とだけである）、この句は事實は直江津での作である。また曾良の隨行日記を見れば、芭蕉は出雲崎や鉢崎では、ただ一宿しただけで、土地の俳人と面會してゐない。從つて、「ところの夷ども押入りて云々」は事實に相違するのである。かういふ二三点から見ただけでも、わたくしは「其袋」の資料的確實性を曾良の書留よりも高

く評價するのをためらふのである。もし、また、志田氏のいふ如く、前掲の五句を芭蕉が一括して手紙で書き送つたものとすれば、それは、敦賀の句が含まれてゐることによつて、敦賀到着以後のことでなければならぬ。從つて、曾良が芭蕉のその手紙の内容を知つて、それに同調するために「荒海や」の句を「文月や」の句ののちに書きしるしたのだとするならば、それは大垣の如行亭でか、もしくはそれより以後のことでなければなるまい。曾良は芭蕉とは山中溫泉で別れて、大垣の如行亭で再會したのだからである。もつとも、如行亭再會以前に芭蕉から曾良もしくは曾良の知人に文通があつて、その文によつてこれを書き留めたといふことも一往は考へられるが、何れにしても、もし志田氏説を生かさうとするならば、曾良は、すくなくとも直江津あたりから以後の俳諧を芭蕉の敦賀經廻以後に於て書き留めたものと考へなければならぬのであつて、それにしては、何故に書留には山中溫泉で芭蕉と別れた以後の芭蕉の句を一切載せてゐないのであらうか。曾良の書留は、次に述べる如く、旅先きで順次に書きしるして行つたやうに見えるのであつて芭蕉と別れてのちの芭蕉の句の書きとめられてゐぬのも、かういふ書留の性質から言へば當然のことと考へられ、從つて、志田氏の説は、曾良の書留の性質に適合しないと言へまうである。但し、「其袋」の五句は一括して同時に申し送られたものではなく、芭蕉が旅先きからその時々に江戸へ言ひ送つたものを、嵐雪がかういふ風に一括して揭げたのだといふ風にも考へられる。それで、この「文月や」と「荒海や」との句を言ひ送つた時には、曾良も同座してゐて、その手紙の内容を知つてゐたから、書留にしるすときにはそれに同調したのだと言へば言へる。だが、それだとすると、曾良は何故に「七夕」と題し、細川春庵亭での句ののちに書き、殊更に「其袋」の詞書に異をたてたのか、やはり、疑問が殘るのである。だから、わたくしは、「其袋」よりも曾良の書留の方により高

い資料的確實性を認め、志田氏の臆說に同感するを得ないのである。

今もいふとほり、曾良の俳諧書留は、大體に於て、芭蕉に隨行中に制作せられた句を制作時の順に書き留めてゐるが、なほ、ところどころ、さうでない個所がある。しかし、それらを更に精査してみると、この俳諧書留は、毎日毎日その場その場で書き留められたものではなくて、俳友の宅に草鞋をぬいで打ちくつろぎ、そして幾日かをそこに逗留したやうな折々に筆を執つたものらしいのであつて、その逗留中の句はもちろん、時ではその途中吟をも併せしるすといふ體裁になつてゐる。わたくしの見るところでは、まづ、那須の餘瀬で起筆して、黑羽・高久・須賀川・仙台・それから飛んで、大石田・新庄・羽黑・鶴岡・酒田・直江津・高田・金澤・小松・山中といふ土地土地で筆を執つたものの如くである。冒頭に、室の八島や日光の句を載せ、しかもそれが順序立ててしるされてゐないのは、これは那須に着いてからのちに、記憶を辿つて書いたからであらうと思はれる。また、立石寺での句が大石田での句ののちにしるされてゐるのは、これは大石田へ着いてから書きしるしたからである。象潟での句は、「十六日着十八日ニ立」と割注のあるのから見て、恐らく酒田へ歸着後に書きとめたのであらう。曾良の書留は大略右のやうな性質を有してゐる。そこで、かういふ眼で眺めると、「荒海や」の句は、高田の細川春庵亭で書き留められたものといふことになる。さうでなければ、金澤の旅宿で書きとめたものといふことになるのであるが、わたくしは、「西の濱」の句もしくは「かか入」の句から「一笑追善」までを金澤での執筆と見るべきだと思ふのであつて、「七夕」といふ題から言つても、內容から言つても、この「荒海や」は高田より以後での作とは考へられず、高田でか、或は高田へくる途中でかの作と見るべきであつて、やはり高田で書きしるしたものと考へるのが妥當だと思ふ。但し、高田で書きと

めたから高田での作だとは斷定すべきでない。すでにそれより先きに出來てゐたのを、高田で書きとめたのだとも言へる。しかし、これがもし出雲崎で出來てゐたものならば、直江津での句の前にか、然らずんばその直後にか、どちらかに書かれるべきであつて、さういふ場合に春庵亭での句のあとにしるされるやうなのは、この書留の中で他に類例を見ないのである。殊に、湯殿山の句のところには、わざわざ「三日月や雪にしらけし雲の峰」の句をあとから書き入れるほどに、忠實に制作順序の記載を守らうとする意圖を示してゐる曾良である。曾良の俳諧書留の關する限りでは、「荒海や」の句は、高田でか、もしくは直江津から高田への途中でかの作だといふ推定に歸着してくるのである。芭蕉は七月六日七日の兩日を直江津で過し、八日に高田へ到つたのであるから、書留がこの句に『七夕』と題したのも、右の推定と適合するのである。しかも、わたくしは、資料としての曾良の俳諧書留を比較的に信用しようとしてゐる。

ところが、最初に言つたやうに、芭蕉には銀河の序といふ文章がある。それによれば、この句は出雲崎での作といふことになる。それと俳諧書留から推定したこととの相違を、われわれはどう解決すべきであるか。

三

頴原退藏氏の編んだ「芭蕉文集」を見ると、銀河の序には幾種類かがある。その一つは「風俗文選」卷五や「摩詰庵入日記」に收めるところのものである。摩詰庵入日記のしるすところによると、芭蕉は曾て繪入自筆の銀河序を風俗文選の撰者森川許六に贈つたのである。それを浪花が許六から讓り受け、更にそれを雲鈴がこの日記に收めたのだ

といふ。從つて、風俗文選とこの日記との銀河序は同一の芭蕉眞筆にもとづいてゐて、傳來の確實なものといふことが出來る。ところが、また別に、菊本直次郎氏等の藏する芭蕉眞筆の銀河序といふのがあつて、それは風俗文選などのとはその本文を異にしてゐるのである。いま讀者の便宜を思つて、左にその兩本文を併揭してみよう。

北陸道に行脚して越後ノ國出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡がしまは海の面十八里、滄波を隔て、東西三十五里によこおりふしたり。みねの嶮難谷の隈々まで、さすがに手にとるばかりあざやかに見わたさる。むべ此島はこがねおほく出て、あまねく世の寶となれば、限りなき目出度島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ、遠流せらるるによりてただおそろしき名の聞えあるも本意なき事におもひて、窓押開きて暫時の旅愁をいたはらむとするほど、日既に海に沈で、月ほのくらく、銀河半天にかかりて、星きらきらと冴たるに、沖のかたより波の音しばしばはこびて、たましゐけづるがごとく、腸ちぎれてそぞろにかなしびきたれば、草の枕も定らず、墨の袂なにゆへとはなくて、しほるばかりになむ侍る。

あら海や佐渡に横たふあまの川　（風俗文選卷五）

ゑちごの驛出雲崎といふ處より佐渡がしまは海上十八里とかや。谷嶺のけむそくまなく、東西三十餘里によこをれふして、まだ初秋の薄霧立もあへず、波の音さすがにたかからず（たかからざればトアル眞蹟モアリ）、ただ手のとどく計になむ見わたさる。げにや此しまはこがねあまたわき出て、世にめでたき島になむ侍るを、むかし今に到りて大罪朝敵の人々遠流の境にして、物うきしまの名に立侍れば、いと冷じき心地せらるるに、宵の月入かかる比、うみのおもてほのくらく、山のかたち雲透にみへて、波の音いとどかなしく聞え侍るに、

荒海や佐渡によこたふ天河　（菊本氏藏眞蹟）

兩者を比較してみると、文の整正彫琢といふ点では、風俗文選の方がはるかに優れてゐる。そして、文の生長といふ点から言へば、菊本氏所藏の眞筆の方が初案に近く、風俗文選の方はその推敲改作せられたものだと見られる。菊本氏本には前に「波の音さすがにたかからず」としるして、しかも後に「波の音いとどかなしく聞え侍るに」と述べてゐるが、これは相照應せざる文面であり、ために全體の文意の透徹を缺く憾みがある。また「波の音高からず」といふのでは、俳句の方の「荒海や」に對應しない。風俗文選の方では、この缺点を取り除くために、「波の音高からず」といふ句を削除し、「波の音いとどかなしく聞え」だけを強調敷衍して「沖のかたより波の音しばしば運びて魂けづるが如く腸ちぎれて」といふ風に改作してゐる。更にまた俳句をして生彩あらしめるために、「山のかたち雲透に見へて」の句の代りに「銀河半天にかかりて星きらきらと冴えたるに」の句を挿入してゐるのである。しかしながら、芭蕉が接した出雲崎での實景は、むしろ「山のかたち雲透に見へて」の方に近かつたのではないかと思ふ。曾良の隨行日記では、前述の如く、この日は夜に入つてから雨になり、その雨が翌朝まで續いたのであるから、すでに夕景より幾分雲が出はじめて、だんだん空模樣もあやしくなつて行つたと見るべきで、「銀河半天にかかり星きらきらと冴」えた晴夜といふのは事實に即せず、さう書いたのは「荒海や」の句の効果をねらつた芭蕉の作爲であらうと推察せられる。芭蕉には、これくらゐの作爲は、常のことなのである。いま、念頭に浮ぶものを擧げただけでも、たとへば、奥の細道の中でも、松島から石の卷へ出る街道を形容して「雉兎蒙蕘の道そことも分かず」と誇張したり、實際には山中から那谷へ引き返したのを小松より山中へゆく途中に那谷へ立ち寄つたもののやうに述べたりしてゐるし、

また、その自筆の句には『うきわれをさびしがらせよ秋の寺』となつてゐるのを嵯峨日記では「うきわれをさびしがらせよ閑古鳥」と改作して、平氣で季の轉換をやつてゐる。こんな例は枚擧に遑がないのであるから、銀河の序でも見聞の事實に相違する改作をやりかねない芭蕉なのである。

ところで、今あげたもののほかに、なほ、銀河の序の一異形とも見るべき文が殘つてゐる。それは、元祿十五年に編纂せられた「柴橋」といふ集に出てゐるものであるが、その本文は次のとほりである。

ゑちごの國出雲崎といふところより沖の方十八里に佐渡が島見ゆ。東西三十里餘りに横折ふしたり。むかしよりこのしまはこがね多く湧出て、世にめでたき島にて侍るを、重罪朝敵の人々の遠流の地にて、いとおそろしき名に立てり。折ふし初秋七日の夜、宵月入果て波の音とうとうとものすごかりければ、

荒海や佐渡によこたふ天の川　（柴　橋）

この文で注目すべきは「折ふし初秋七日の夜」とあることと「波の音とうとうとものすごかりければ」とある点とであらうと思ふが、銀河の序は、いづれも皆年月日の記入がないにかかはらず、この文章では、はつきりと七月七日の夜と日時を指摘してゐるのである。また、菊本氏本銀河の序などには「波の音高からず」となつてゐるのに、この書では、波音が荒く高いことになつてゐるのである。この「柴橋」の文は何をよりどころとしたものか、それはよく分らないのであるが、しかし、撰者正興が恣意的にかういふ文を作りあげたものとしては、あまりに文が整ひすぎてをり、やはり何かよりどころがあつたものと思はれ、しかも曾良の書留の詞書「七夕」といふのとその時日が符節を合はせてゐるのである。それで、この「柴橋」の文章も芭蕉の書いたものにもとづいてゐると考へ、銀河序の一異文

と考へて差支へないのではないかとわたくしは思つてゐる。

さて、かやうに銀河序に幾種類もの形があり、しかもその各々の文面に矛盾撞着があるといふことは、一體何を物語つてゐるのであらうか。

銀河の序は、いはば「荒海や」の句の詞書である。かういふ長文の詞書に類するものは、芭蕉には、他にもその數がすくなくない。そのうちでも、葛城山の吟、文字摺石の文、笠島の句の詞書等は、銀河の序の場合のやうに、その文形に幾種類もあつて、それぞれ少しづつ違つてゐるのである。けれども、これらの文には相互に矛盾撞着する記事がない。しかるに、ひとり銀河の序にのみ前述の如き矛盾撞着があるのである。曾良の俳諧書留から推察するに、文字摺石や笠島は句と文とが同時に成つてゐる。また吾人の調査では、大體のところ、その内容は事實に即してゐる。けだし、句と文とが同時に成り、そして、句文ともに事實ありのままをしるしてゐるからして、このやうに幾たびか文を書きかへても矛盾撞着がないのであらう。これに反して、銀河の序は、句も文も事實から遊離してゐる。出雲崎は、八月四日によぎつたのであるから、「柴橋」に七日の夜といふのは誤りである。また、風俗文選に、「銀河半天にかかりて星きらきらと」といふのも事實でなかつたらうことは、前に述べたところである。菊本氏藏眞筆の方が比較的眞實に近いかと思ふが、芭蕉は、その眞實を遠ざかるやうに改作してゐるのである。つまり、さういふ風に改作した方が、「荒海や」の句をよりよく生かすことになると考へたからに違ひない。

前にしるしたとほり、芭蕉が出雲崎に宿つた時は、夜に入つて雨となり、そして、一晩中降りつづいたのであるが、荻原井泉水氏の「奥の細道を尋ねて」などには、出雲崎では宵のうちは天の川は佐渡の方へ流れず、夜半になつ

て佐渡へ流れると書かれてゐる。だが、その夜半には雨だつたのだから、芭蕉は實際には天の川の佐渡へ流れたのを見てゐないし、或はひよつとしたら宵のうちから雲のために全然天の川を見てゐなかつたかも知れない。（人によると、天の川は出雲崎では絶對に佐渡へ横たはらないといふ人もある。）とすると、芭蕉は、この銀河の序に於ては、句文ともに、うそを言つてゐるのだといふことになる。また、出雲崎を出てからも、高田へ着くまでは、ずつと雨續きだつた。だから、芭蕉は、七月八日までは、夜空に天の川を見てゐないことは確かである。「荒海や」の句は、つまりは、事實に即しない、想像の句なのである。この句が、このやうに寫生の句でなく、觀念的内容を多分に含んだ句であつたからこそ、詞書をいろいろに變改して、芭蕉は工夫を凝したのではないか。わたくしは、句がまづ成り、文は後から書き添へられたのであらうと思ふ。もちろん、積極的にそれを證明する材料はないのだけれども、曾良の書留に「七夕」と題して句だけしか擧げてゐないのが、一つの消極的證明材料であるし、今のべたやうに、銀河序に種種の異文があつて、その間に矛盾の記事があるといふことも、またその推定を可能ならしめるのである。

元來、芭蕉の書いたものには、句と文と同時に成る場合と同時に成らざる場合とがある。たとへば、澁笠の銘、白髪の吟の如きは、句と文と同時に成つてゐない場合である。澁笠の銘は、句は盧栗所收のものであり、文は元祿年間に出來たものと考へられ、白髪の吟は、句は元祿七年のものであり、文は貞享元年野ざらし紀行の時のものである。もつとも、この二文は共に和漢文藻に出てゐるものであるから、そこには例の支考のさかしらがなきにしもあらずといふ疑ひも懷かせられるかも知れないが、澁笠の銘は「雪丸げ」にも收められてゐるから、まづは間違ひがあるまい。なほ、この外に、「しをらしき名や小松吹く萩薄」の詞書もやはり句と同時に出來てゐないのである。この詞書

は、眞蹟もあり、「雪丸げ」にも出てゐるから、間違ひのないものであるが、もとこの句は曾良書留や奥の細道によれば、元祿二年七月二十五日の小松の山王會での句であり、小松といふ地名をよみ込んで、その土地をたたへる意を寓してゐるものである。ところが、芭蕉は、のちにこれに詞書を附して、旅中野外の實景をよんだ句の如く仕立てかへてしまつてゐるのである。かういふ例があるから、銀河の序の如きも、のちに文を添加して、出雲崎での作の如く仕立てたのではないかと推測して、少しも不合理ではない。

以上、話は些か廻りくどくなつたが、結局わたくしの言はうとすることは、銀河の序は、「荒海や」の句を効果的ならしめるために芭蕉のあとから添加した文章であつて、よほど作爲的なところがあり、事實に忠實でない部分もあるやうだから、この文章を證據として「荒海や」の句を出雲崎での作だと斷定することを避けたいといふことである。「しをらしき名や小松吹く」の句の詞書の場合のやうな例もあるのだから、芭蕉の眞蹟文だからとて、必ずしも事實どほりだとは言へない。

なほ、注意したいことは、「奥の細道」の北陸路の記事では、さきの「しをらしき名や」の句にしても、また「あかあかと日はつれなくも秋の風」の句にしても、傳へられる長文の詞書によらないで、ただ制作地だけを示してゐる。そして、どちらかといふと、その長文の詞書は、後日に添加せられたもので、さういふ詞書の添加せられない元の形で奥の細道には取り入れられてゐる。それらから類推しても、「荒海や」の句も、銀河の序以前の形で奥の細道に取り入れられてゐるのではないか、すなはち銀河の序以前の形といふのは、曾良の俳諧書留にしるしてゐるやうな形であり、「七夕」の句としてであり、「文月や」の句よりも後に作られたものとしてである。

だが、「荒海や」の句を出雲崎での作だとするのは、ただに銀河序だけではない。「勸進牒」や「泊船集」や「雪丸げ」にもまた出雲崎での作となつてゐる。われらは、この事實を無視することが出來ない。では、それをどう考へたらよいのであらうか。

四

泊船集は芭蕉の句文集であるが、その記事には信の置けない部分もあることは周知のことだから、これについては、今改めて問題とするに及ぶまい。

「雪丸げ」は、曾良の記錄をもとにして、曾良の甥の周德が編纂したものだといふから、一往はここに取りあげてみなければなるまい。だが、わたくしの精査したところでは、この書は必ずしも曾良の記錄にのみ從つてゐるやうには見えない。曾良の俳諧書留や隨行日記によつてゐると思はれる個所と、奥の細道の本文にもとづくとおぼしき個所と、更にそれ以外の資料たとへば芭蕉の眞蹟などによつたと思はれる個所とがあつて、全體を通じて眺めたところでは、曾良の書留をもととして、更にそれの不備を補ひ、より完全なものに改編しようと志してゐるものの如くである。從つて、雪丸げは句の排列も必ずしも制作順にはなつてゐないのである。雪丸げの「荒海や」の句の詞書は、眞蹟の銀河序の前半を拔抄したもので、周德は、多分、眞蹟の銀河序にもとづいて入集させたものと思はれ、しかも、その詞書の內容に從つてこれを出雲崎での句と判定して直江津の句より前に出したものと思はれる。すなはち、ここにも曾良の書留の誤りを是正し、完全なものに改編せむとする意志の發露があると考へられる。雪丸げに於ける「荒

海や」の句のあり方は、かういふ風に、もともと銀河の序にもとづいてゐるのであるから、これを證據として取りあげてくべきものではないのである。

次に、勸進牒であるが、これは、芭蕉の門人の路通の撰であり、路通は奥の細道の旅には芭蕉を敦賀まで出迎へてゐる人である。そして、この集は、その路通が諸家から俳諧の勸進を受けて編集したもので、元祿四年に出來てゐる。されば、いまこの集に「出雲崎にて」としるされてゐることは、その集の性格なり、その撰者なりから考へて、これをば無下に退けることが出來ない。この場合、芭蕉の銀河序がいつ作られたのか、それが明らかになると好都合なのだが、今のわたくしは、その成稿の日を知らない。從つて勸進牒の詞書が銀河序にもとづくものかどうかを明白にするを得ないのであるが、嵐雪の「其袋」に、「北國何とやらいふ崎にとまりて」といふ詞書が、出雲崎を暗示するやうに思はれるところから推量すると、既に元祿三年の春頃には「荒海や」の句が芭蕉門下では出雲崎での作だといふ風に言ひ傳へられてゐたのではないかと思ふ。或は、當時近畿に滯在した芭蕉自身が、出雲崎での吟としてこれを門下に披露してゐたのかも知れない。

そこで、問題は、曾良の書留とこの勸進牒との相關關係如何といふことに集約せられてくるのであるが、曾良の書留によれば、前々節で述べた如く、この句は直江津内至高田での作といふことになり、七夕の句として發表せられたものといふことになるので、しかも、前言の如く、わたくしはこの書留の資料的價値を高く評價してゐるのである。しからば、この書留から推定せられる事實を勸進牒の詞書と衝突せしめないやうにするには、どうこれを解釋すればよいか。

かういふ風に檢討して來た結果、その結論として、わたくしの現在言ひ得ることは、次のとほりである。すなはち、この「荒海や」の句を出雲崎での作だとする積極的根據はない。むしろ、これは、曾良の俳諧書留の記載に從つて、直江津内至高田での作だといふ風に考へるべきかも知れない。しかし、この句の趣向もしくは構想は、出雲崎から佐渡を目前にしてのものであつたらう。といふのは、鉢崎や直江津では天氣が惡くて佐渡はもちろん見えなかつたらし、高田では全然海が見えない。だから、その趣向は出雲崎での體驗にもとづいてゐるとしか考へられないからである。言ひかへれば、その趣向は既に出雲崎で成つたか、また、のちに構想せられたとしても出雲崎でのものとして構想せられてゐることは必須である。蓋し、芭蕉は、さういふ句境を生かすために、銀河の序を執筆してゐるのであり、また門下の句集にも出雲崎での吟として傳へられることにもなつたのであらう。但し、芭蕉の構想が成熟して句に成り、それを初めて側近の曾良にもらしたのは、直江津から高田へゆく途中もしくは高田でのことであつて、その時は、七夕の句として發表したのであらう。奥の細道では、この最初の發表の時の心持をいたはつたのである。「文月や」の句の次に「荒海や」の句を置いたのは、芭蕉の故意の逆置ではない、句の成つた順序に排列したのである。而して、その場合の「荒海や」の句は、七夕の句として理解せられなければならない。

今日わたくしの眼にふれた資料を綜合してわたくしの考へ得た結論は、凡そ右の如くである。ところで、問題はこれで盡きるのではない。

五

わたくしは、さきに屢々銀河の序の文も句も決して忠實な寫生でないといふことを言つた。事實を穿さくすれば、或はこれは虚構の文、虚構の句といふべきかも知れない。殊に、「荒海や」の句の如きは、銀河が佐渡の方へ流れないといふのであるから、全くの空想の句である。そして、これを「七夕」の句として構想せられたものと解するならば、いよいよ以て抽象的觀念的句作といはざるを得ない。恐らく、芭蕉としては、その腦裡に湧然とわき起つた佐渡が島への旅愁を十分にこの一句に表現させようとしたものであらう。この場合、天の川が佐渡が島へ實際に横たはる横たはらぬは、彼にとつて問題ではなかつたのであつて、ただその感傷を表出するに適切な世界を一句の上に象徴してくることだけが何よりも必要だつたのである。ところが、この場合に、われわれの問題となるのは、芭蕉の感傷が決して視覺によつて誘起せられてゐないといふことである。銀河の序には、佐渡が島が眼前に手にとるが如くに見えると述べてゐるけれども、その時の天候の具合によつて、また佐渡への距離から言つて、果して佐渡が島がそのやうに近々と見得たかどうかも疑はしいのである。その銀河の序に「大罪朝敵の人々遠流の境にして物うき島の名に立ち侍れば」と言つてゐるのによつても察せられるやうに、既に佐渡が島といふものへの既成觀念があつて、その觀念にもとづいて彼の感情が動いてゐるのである。そして、また一方に、七夕とか天の川とかに對する既成の觀念的情緒があつて、それと佐渡とを結合させることによつて、彼の詩情は一入昂揚するのである。然るに、われわれがこの「荒海や」の句から享受するところのものは、極めて視覺的であり、具象的であり、實感的迫力をもつてゐるのである。そこに問題があると思ふ。

また、奥の細道の中に、日光山のことをしるした句や文に、

今この御光一天にかがやきて恩澤八荒にあふれ、四民安堵の栖穏かなり。

あらたうと青葉若葉の日の光

といふのがある。この文は、東照宮の神威を讃美したものであり、その文を受けたこの句もまたその神威をたたへた内容をもつてゐて、「日の光」といふ語に「日光」の意を含ませてゐるのである。この句、初案は、

あらたふと木の下闇も日の光

とあつたので、それを、のちにこのやうに改作したのであるが、初案の形だと一層よく東照宮讃美の意味が汲みとれる。しかし、改作せられた句形でも、東照宮讃美の意味をもつてゐるものであることは、その前文からでも明らかである。それで、荻原井泉水氏は、この句を觀念一片の句だと批評したわけであるが、改作に於ては、この句は單なる觀念の露出から救はれてゐる。「青葉若葉」と言つたために、初夏の陽光の莊嚴さが生き生きと讀者に實感を以て迫るのであつて、初案の句に比較すると、非常に具象性を帶びたことになる。すなはち、この改作過程から見ると、芭蕉は觀念的内容に如何に具象性を與へようかといふことに苦心してゐるやうに思へるのである。ところが、芭蕉のこの句が出來たころの日光は、まだ青葉のころとなつてゐなかつたといふ説がある。それに從ふと、ここでも芭蕉はうそを言つてゐることになるのである。だが、たとへ、それがうそであつても、この句は享受者には實感的迫力をもたらすのである。「荒海や」の句の場合とても、やはり同樣である。つまり、そのうそが眞實となるところのその魔術が、どこから來るかということが、問題なのであつて、芭蕉藝術の魅力と迫力とを解く鍵は、その問題を究明するところから發見せられて來るであらう。わたくしは、更に進んで、さういふ問題について考察の眼を向けようと思ふ。（嗣出）